

郷土史への扉

霧島山の新燃岳が一月二十六日に約三百年ぶりに大噴火をしました。霧島山は過去にどのような火山活動を繰り返してきたのでしょうか。

今回は新燃岳の噴火の歴史や霧島山の成り立ちについて紹介します。

一 霧島山とは

霧島山は、九州南部の鹿児島県と宮崎県境に広がる火山群の総称であり、霧島連山、霧島連峰とも呼ばれています。最高峰の韓国岳をはじめ、高千穂峰など周辺には約二十以上の火山が連なっており、ひとつの山を形成しています。

ところで、「霧島」という地名はいつごろから呼ばれるようになったのでしょうか。歴史書に初めて霧島という名が出てくるのは、「續日本後紀」の承和四(八三七)年八月の段です。一方、「續日本紀」の延暦七(七八八)年七月の段には「大隅国曾於郡曾之峯」と書かれており、まだ霧島の名が付いていないと推測されることから、霧島という地名は七八八年から約五十年の間に定着したと考えられます。

二 霧島山の歴史

霧島山の成り立ちは、約三十四万年前に現在のえびの市を中心とした地域

が大噴火を起こして「加久藤カルデラ」を形成したところから始まります。

その後、カルデラの南縁付近で火山活動が始まり、三十万年前から十五万年前にかけて栗野岳・烏帽子岳・矢岳(約二十万年前)、獅子戸岳(約十五万年前)などの古い時期の火山ができました。

約十万年前には活動が再開し、白鳥山・蝦野岳などが造られました。その後、活動は東西に分かれ、西部では大浪山(五万年前)、韓国岳・甕岳(一万七千年前)などが、東部では大幡池(六万

霧島山の成り立ち

年前)、夷守岳(約四万年前)、中岳(約一万年前)、新燃岳(約九千年前)、高千穂峰(約七千年前)、御池(四千六百年前)などができました。

三 記録にみられる噴火の歴史

霧島山の噴火の中で最も古い記録は、続日本紀に天平十四(七四二)年の御鉢噴火の様子が書かれています。大隅国の国司から「十一月二十三日から二十八日にかけて空から太鼓のような音が響き、雉が驚き地震があった」と報告があり、その調査のため使者を遣わしたという内容です。

また、延暦七(七八八)年には「三月四日の夜八時ごろに霧島山の御鉢が噴火して溶岩や噴石による火災や地鳴り、地震などがあった。噴火そのものは四時間ほどで治まったが降灰はひどく、御鉢から約二十キ離れたところで、六十キもの火山灰が積もった」と当時の様子が書かれています。

四 新燃岳の噴火

今回の新燃岳の噴火は、火山灰などの成分分析で享保元(一七一六)年から翌年まで続いた火山活動に酷似しているといわれていますが、当時の噴火

活動はどのようなものだったのでしょうか。気象庁の記録や「霧島町郷土誌」には次のような内容が書かれています。

正徳六年二月(六月に元号が享保に変わる)、大音響とともに大爆発が始まりました。この噴火活動は軽石の噴出とともに火砕流、泥流が繰り返し発生したことが地層(堆積物)調査によって分かっています。

十一月には火砕流を伴う大規模な噴火があり、死者五人、負傷者三十一人、焼死した牛馬四百五頭の被害があり、農家や神社仏閣など六百余軒が焼失し

ました。降灰による農作物への被害は甚大で、周囲の田畑は厚さ十〜二十キの火山灰に覆われ、約八百五十キ離れた八丈島(東京都)でも降灰がありました。

文政四(一八二二)年の噴火は、山頂付近に白煙が観察され、その後水蒸気爆発を伴って噴火し、降灰によって天降川で泥流が発生しました。さらには、八合目付近に新しい火口が形成され、軽石や火砕流の噴出を伴う噴火が繰り返されました。最近では昭和三十四年にも爆発的噴火が記録されています。

五 霧島山とともに

このように、霧島山は約三十万年前の時を経て大小さまざまな火山活動を続けて現在の霧島山まで成長してきました。火山活動は温泉などの自然の恵みをもたらしますが、反面、甚大な被害をもたらします。

歴史を振り返ると、私たちの祖先は自然の驚異にさらされながらも懸命に生き抜き、あらゆる困難を克服してきました。今回の新燃岳の噴火活動が一刻も早く終息することを願いながら、私たちが力を合わせて、先人に負けぬように頑張っていきたいと思えます。

※日付は旧暦で表しています。

(文責 鈴)